The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	”Knowledge” of Vietnam in Japan -Evolution of the Vietnam War Generation
Author(s)	Roustan, Frederic
Citation	大阪大学, 2006, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/58804
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

氏　　名	Roustan Frederic
本籍（国籍）	
学位の種類	博士（日本語・日本文化）
学位記番号	甲 第　６９　号
学位授与年月日	平成１８年９月２７日
学位授与の要件	学位規則第４条第１項該当　課程博士
研究科及び専攻	言語社会研究科言語社会専攻
学位論文題目	"Knowledge" of Vietnam in Japan - Evolution of the Vietnam War Generation
論文審査委員	主 査　教 授　五 島 文 雄
	副 査　教 授　田 中　　仁
	副 査　教 授　冨 田 健 次
	副 査　教 授　嶋 本 隆 光
	副 査　准教授　杉 田 米 行

論文の内容要旨

本稿の目的は、日本におけるベトナム研究を理解しようとするものである。本稿では、ベトナム戦争の時点からベトナム研究に係わってきた研究者達の経験に焦点を当てつつ、社会史的なアプローチによってこの目的を達成しようとした。

日本と東南アジアとの関係は歴史的に長期にわたる。そのようなこともあり、日本では東南アジア地域に関するいくつかの科学的な研究も１８世紀のはじめには生まれている。これら文書の中には、ベトナムに関する地理、歴史、外交に言及したものも含まれている。これが、日本におけるベトナムに関する知的生産の始まりである。以来、ベトナムに関する様々な分野の知的生産が行われ、次第に専門化され、ベトナム研究は研究の一分野として独自の地位を確立してきた。この知的生産の過程で、ある歴史的な大事件が認識の大きな変化を引き起こした。ベトナム戦争である。

そこで、本稿では、①ベトナム戦争が、なぜ、どのようにして日本において今日のようなベトナム研究の様々な専門的分野における成果をもたらし、ベトナム研究に研究の一分野としての独自の地位を確立させたのか？　②ベトナム研究において、認識の大きな変化がどのように生じたのか？[具体的には、ベトナム研究の組織化、方法論、テーマ（研究課題）、ベトナムに対する認識とベトナムとの関係、研究資料や資料入手先、ベトナム研究組織の構成（大学などのアカデミックな研究・教育機関、各種研究所、研究会）などを考察]、さらに、③ベトナム研究におけるベトナム戦争世代とは何なのか？という問題を設定することにした。そして、これらの問題、疑問に回答を与えることで、筆者はベトナム戦争世代の研究者達の人生並びに彼らの研究成果としてのベトナム研究自体においてベトナム戦争によって引き起こされた認識の大きな変化を理解しようと努めた。

日本では、ベトナム戦争は海の向こうの戦争ではなかった。ベトナム戦争は、いくつかの側面において、日本社会に多大な影響を与えた。しかし、本稿の考察対象者であるベトナム戦争当時学生であった人々にとって、ベトナム戦争は今なお非常に重要な事件で有り続けている。本稿の考察対象者であるベトナム戦争世代とは、歴史的大事件であるベトナム戦争に特別な関係をもった人々である。他の多くの日本人と同様、彼らはマスメディアによってベトナムとの関係を築き、ベトナムを発見した。彼らの多くは程度の差こそあれ、１９６０年代後半の学生運動と反戦運動に参加し、活動家としての経験を有している。この活動家としての体験という点からみると、本稿における考察対象者は主として３つのグループに分けることができる。親共産主義という政治的立場をとるグループ、反共産主義という政治的立場をとるグループ、いずれの政治的立場にも立たないグループ、の３つである。実際、いずれの政治的立場にも立たないグループは、活動家としての経験を持たなかった。しかし、このグループは研究対象者の中では少数派に属する。日本のベトナム研究においてベトナム戦争世代と呼ばれているグループは、当時の他の学生とは異なり、ベトナム研究に携わることを選択した。神が彼らにベトナム研究に係わっていくことを予定していたわけではない。歴史的大事件（ベトナム戦争）と研究対象者達の人生の軌道を変えたこの自覚的選択との関係性にこそ、本稿でいうベトナム戦争世代の共通の基盤がある。

ベトナム戦争世代の研究者達の証言によれば、彼らがベトナム研究に携わるようになったのは、マスメディアやプロパガンダグループによって形成されたベトナムイメージを超克したいとの欲求に動機付けられていた。当時、すでにアカデミックなベトナム研究がなかったわけではないが、ベトナム戦争世代の研究者達は、当初、既存の研究が形成してきたベトナムイメージの一部を否定した。既存のアカデミズムによるベトナムに関する“知”が東洋史学と深い関係にあり、この東洋史学が中国とフランスの支配の下に従属するベトナムイメージを彼らに与えていたからである。このような事情から、ベトナム戦争世代の研究者達は、ベトナムの現状を理解したいと考えたのである。そして、自分達のこのような欲求を満たすべく、ベトナム語を学び始めた。それも、多くは独学によって学び始めたのである。

しかし、①その活動家としての経験、②限られたベトナムへの渡航機会、③研究上の資料的制約、の３つの理由によって、彼らは当初のベトナムの現状を理解したいという希望を達成することができなかった。この３つの理由のうち、決定的であったのは、①その活動家としての経験であった。彼らは、活動家としての経験とその政治的立場によって、ベトナムへの渡航機会を平等には与えられなかったのである。また、このようなベトナムへ自由に渡航できないという状況とベトナムの資料に自由に接することができないという状況が、研究課題の選択をも制約することになった。しかし、このような制約にもかかわらず、彼らが選択した研究課題は、ベトナム戦争時代の活動経験と関連付けられるような課題であった。つまり、彼らなりの「アンガジュマン：参加」であった。換言すれば、ベトナム戦争世代によって生産されてきたベトナムに関する“知”は、彼らの活動家としての経験と直接関係するものであった。それゆえに、この活動家としての経験が、彼らの人生に本質的かつ具体的な影響を及ぼし、結果として日本

におけるベトナム研究にも影響を及ぼしてきたのである。彼らにとって、活動家としての過去の経験は、たった一度の経験で終わるものではなく、時間を積み重ねるに従って再構築されるタイプの経験であり、ベトナム研究自体に対してというだけではなく、その他のベトナムとの関係においても反映されるような本質的なものであったと言えよう。

ベトナム戦争が開始される直前の１９６０年代前半までに、日本では国家的な政策として、アジア研究(発展途上国研究)に特化する研究所（たとえば、１９６１年に創立されたアジア経済研究所や１９６３年に創設された京都大学東南アジアセンター、１９６４年に創立されたアジア・アフリカ言語文化研究所）や大学の学部（たとえば、１９６４年に創立された東京外国語大学ベトナム語専攻。大阪外国語大学ベトナム語専攻はこれに遅れること１３年、１９７７年に創立されている）を創設．発展させた。これらの研究所、学科では地域研究（area studies）という新しい方法論がアメリカから輸入され、日本人研究者によって採用された。これらの新しい研究所、学科などには、ベトナムに関する種々の研究のために人と資金が投入された。しかし、新設された研究所や学科、とりわけ、ベトナム語を専攻とする学科が存在したにもかかわらず、ベトナム戦争世代の研究者達はこれらの研究所や学科の中で再編されることはなかった。そして、その後、ベトナム研究の専門家達はいくつかの場所に分散して所属することになった。しかし、ベトナム研究を組織化しようとする試みはベトナム戦争の時点から大学などのアカデミズムの世界や研究所の外から始められた。研究者を集めようとする最初の試みはいくつかの協会内部で始まった。しかし、これらの協会による組織化は常に活動家としての経験によって政治的な分裂を生み出した。以来、こうした活動家としての経験が新たな装いをもって再編されるまで、政治的な対立が強すぎたために、日本ではベトナム研究やベトナム戦争世代の研究者のいかなる組織や団体にも権威を付与することはできなかった。このような状況に変化が生じたのは、１９８０年代初頭であった。それは、いくつかの場面においてベトナムの現実に遭遇することによりもたらされた変化であるが、１９９０年代初頭には一定の成果を得ることになった。活動家としての経験は社会との関係の再構築においても、また、個人として、あるいは集団としての再編においても決定的な役割を果たしてきた。

活動家としての経験が新たな装いをもって再編されたことにより、研究対象者のベトナム認識は変化し、ベトナムとの関係も同様に変化した。もし、かつてのベトナム戦争の時代および政治活動をしていた時代に、ベトナムが（社会として、抵抗勢力として…）一つのモデルと理解されていたとするならば、研究対象者達の経験が新たな装いを持つことによって、このような理解は逆転したといえよう。すなわち、これまでとは逆にベトナム戦争世代の研究者達はベトナムが日本社会のいくつかの要素を取り入れることを支援しているのである。

論文審査の結果の要旨

本審査委員会は、２００６年８月１８日にルスタン・フレデリック氏に対する最終試験を行い、博士論文“Knowledge about Vietnam in Japan：Evolution of Vietnam War Generation”を厳正に審査した。以下、博士論文審査における議論の概要を１０点にわたり紹介し、最後に審査委員会としての結論を述べる。

１．博士論文審査における議論の概要

＜論文のテーマに関する研究史と研究意義について＞

ルスタン氏の論文の目的は、日本におけるベトナム研究を理解しようとしたものである。同論文では、ベトナム戦争時代に大学生・大学院生であった１９４３年から１９４９年生まれのベトナム研究者１２名（彼らを「ベトナム戦争世代」のベトナム研究者と呼ぶ）の経験に焦点を当てつつ、社会史的なアプローチによってこの目的を達成しようとしている。

同氏は、日本においてこれまでに発表された様々なタイプのベトナム研究史を読み、日本においてはベトナム戦争以降にベトナム研究が量においても、テーマ、方法論においても以前とは比較にならないほどの発展を見せており、ベトナム戦争後に研究が衰退したフランスやアメリカとも異なることを知る。また、ベトナム戦争を契機に日本ではベトナム研究に大きな転換がもたらされたとの指摘も目にするが、その大きな転換によって何がどのように転換したのかを学問的に説明したものがないことに着目した。そこで、ベトナム戦争という歴史的大事件が日本におけるベトナムに関する知的生産にどのような意味を持ったのかを歴史的に論じようとした。

本審査委員会はルスタン氏が十分にテーマに関する研究史を踏まえた上で、テーマ設定をしていることを確認し、テーマについては「ベトナム戦争」が世界的な大事件であっただけに、将来的には他国との比較可能な視点を提供しており、十分に研究意義を有するテーマ設定であると評価した。

＜方法論１：社会史的なアプローチについて＞

ルスタン氏によれば、社会史とはもともとは人々の日常生活の中で有する社会的な繋がりや関係性に焦点を当てたものであり、単純に個人史を描くのではなく、間接的要因との関係、とりわけ社会との関係をも見つめつつ研究を行なうものであるという。しかし、そのスタートポイントはあくまでも個人の経験であるともいう。また、社会史の具体的方法論は多様であるが、その中には歴史的事件は歴史の本質なのであって、視角によっては、十分に歴史のダイナミズムを開示しうる場であるという立場が存在する。同氏が博士論文で「ベトナム戦争」を歴史的事件と表現し、その意味を問おうとしているのは、まさに、この社会史の立場の方法論に沿うものである。したがって、同論文では、日本におけるベトナム研究の発展を論じる際に、日本社会との関係も視野に入れつつ「ベトナム戦争世代のベトナム研究者」個人の経験（進化）と歴史的事件である「ベトナム戦争」を関連付けることが意識的に行なわれることになる。同氏は、社会史研究において世界をリードしてきたフランスで、同歴史学の方法論について特に関心をもって研究をしてきた学生であり、序章では同歴史学の方法論と本論文で採用する具体的な方法論について詳述しており、理論面について高い見識を有していることが窺え、審査員全員がこの点も高く評価した。

＜方法論２：アンケートとインタビューの実施＞

ルスタン氏は、方法論上重要である「個人の経験」を分析するにあたり、「主観的」部分と「客観的」部分の双方を検討した。そのうち、「主観的」部分を理解する為に、本論文の主たる分析対象者であるベトナム戦争世代の研究者９名に８４項目にわたるアンケートを予め送付し、それに基づくインタビューを実施した。さらに、ベトナム戦争世代前の研究者３名にも同様のことを行なった。この点は、ルスタン氏の論文において初めて試みられたことであり、同氏の研究の独自性を示すものとして評価された。

なお、ベトナム戦争世代の回答・語りの内容を歴史的な文脈で理解するには、当時の日本における思想状況への理解が不可欠である。すなわち、現代の目から見れば、「異常」としか言いようのない 1950～60 年代の社会主義の隆盛、史的唯物論、実存主義の広汎な流行などについての理解が不可欠である。本論文では若いルスタン氏がこれらの思想、ならびに当時の日本における思想状況をよく研究、理解していることもその論述、引用文献から分かり審査委員から高く評価された。

＜方法論３：東京外国語大学と大阪外国語大学のカリキュラムの分析＞

「個人の経験」の「客観的」部分としては、著書や論文（研究テーマの推移）、職歴なども検討されているが、その際、東京外国語大学と大阪外国語大学のベトナム語学科（専攻）創立以来のカリキュラムも分析対象としている。そして、教育内容、スタッフ、それぞれの研究者の専門領域などについて具体的かつ詳細に紹介、分析している。ここでは、ベトナム戦争世代の研究者がどのように関わってきたのかが明らかにされると同時に、両大学が日本におけるベトナム研究の発展に果たしてきた役割も分析されている。このようなカリキュラムの分析もルスタン氏により初めてなされたものであり、審査員一同が高く評価した。一部に事実関係の誤りが見られたが、分析全体の評価は実証的かつ妥当であることも確認された。

＜論文の構成：論理性について＞

本論文では、序章において上述の研究史、方法論を丁寧に説明したのち、第一章から第三章においてベトナム戦争世代の研究者の経験についてクロノロジカルに叙述しており、彼らの変化の様子が理解しやすい構成となっている。そして最後に結論が述べられている。ただし、第二章ではその半分近くを割いてベトナム戦争以前のベトナム研究について言及しているので、読者にやや違和感を与えやすい。この点は、論文構成に関するひとつの問題点であるとの指摘もあった。この指摘の妥当性については多くの委員も工夫の余地があったことに同意したが、その論述の必要性については第二章の冒頭において説明があり、長期的な視点の中で日本におけるベトナム戦争世代の特徴ならびにベトナムに関する“知”の状況を分析するには必要であったと審査委員の多くが評価した。

＜論文の叙述１：叙述のスタイルについて＞

ルスタン氏によれば、ベトナム戦争世代のベトナム研究者はベトナム戦争期の反戦・反米運動の活動家としての体験という面からみると親共産主義、反共産主義、いずれの政治的立場にも立たないグループに分けられる。このような多様性に留意しつつも、彼らによって推進されてきた日本のベトナム研究がいまだ明確な形もない状態から世界的水準に至るまでに発展した過程を、一個の有機体（「ベトナム戦争世代」）の進化、成長の様相で描いている。この叙述方法は、非常にユニークであり、興味深い着眼点であると審査員全員から高く評価された。

＜論文の叙述２：叙述自体の論理性・実証性＞

審査委員会ではインタビュー偏重主義の傾向があり、いま少し、インタビュー内容を検証するなど、その利用には慎重であるべきではなかったのかとの意見が出された。また、インタビューを資料として用いることの限界を理解できているのだろうか、という疑問も出され、その方法論に大きな問題があるという指摘もなされた。この点については、ルスタン氏、並びに主たる指導教員から、インタビューに応じて下さった人物の著作や当時の研究機関の雑誌・学会誌なども可能な限り参照したが、本論文で必要とする主観的なことは余り書かれていなかったという止むを得ない面があったこと、また、書かれていたとしてもインタビューに応じて下さった人物を匿名で叙述する必要があった為、実際には、２０年前の著作で述べていることを論文内で引用しても、出典を明記できず、実際以上にそのような印象を与えているとの説明があった。審査委員の多くは以上の事情を理解した上で、将来、匿名にする必要がなくなり、本論文を基礎にして出版をするときには、改善が必要であろうが、今回の審査ではこの欠点をもって不合格にするには当たらないと判断した。不合格とした委員は、この方法論上の問題が、この博士論文の価値を判断する上で、最も重要な役割を果たす要因のひとつであり、この点をもって、十分に不合格にする根拠になり得ると判断した。

＜論文の叙述：フランスに関する叙述＞

博士論文のテーマは、日本におけるベトナム研究に関する理解である。しかし、フランスに関する叙述も多い。例えば、ベトナム戦争時代についてはフランス知識人の日本に与えた影響としてサルトルの実存主義に関する言及があり、フランス人ベトナム研究者の日本人ベトナム研究者に与えた影響としてシェノーに関する言及がある。また、ベトナム戦争以前についても、フランス研究者と日本研究者の交流についての言及がある。この点については、審査委員全員が日本におけるベトナム研究の発展の歴史とベトナム戦争世代の特徴を浮き彫りにするという役割を果たしており、フランス人であるルスタン氏でなくては論述し得なかったであろうと高く評価した。

＜論文の叙述３：英語論文としての完成度＞

審査委員全員が、最終提出原稿においても、文法、綴りの間違いが多々あり、パラグラフとパラグラフのつながり、注釈のつけ方など英語力に起因する論理構成力の不足が感じられることは遺憾かつ大きな問題であり、博士論文としては形式面・技術面での完成度が不十分であると評価した。ただし、英語がルスタン氏にとって外国語であることを考慮すれば、この点のみをもって不合格にするには至らないと多くの審査委員は判断した。不合格とした委員は、叙述面は非常に重要であり、単なる英文法の誤りのみならず、内容が明確に伝わらない部分もあり、地域研究の基盤として言語の重要性を主張する本学においては、この点をもって、十分に不合格にする根拠になり得ると判断した。

＜博士論文の総合評価＞

フレデリック氏の博士論文は、研究史を良く踏まえた上でテーマを選定しており、そのテーマは知的好奇心を刺激するものである。また、テーマ解明に用いられた方法論についてもルスタン氏の独自性が示され、論文の内容は随所にすばらしい論点もみられる。また、本来の目的である、日本におけるベトナム研究史に新たな一ページを切り開いたといえる。これらの点では、審査委員全員が高く評価した。また、多くの審査委員が、このような内容の論文が英語で執筆され、世界の人々に広く読まれることは、大阪外国語大学、日本のベトナム研究、より広く捉えれば日本語・日本文

化に対する理解が世界で深まることを意味する。まさに、本学に日本語・日本文化特別コースを設置した意義を証明し、我々が学生に期待するところを具現した論文である、と評価した。

２．審査委員会としての結論

以上が、本審査委員会において議論された概要であるが、審査委員会内部では「博士論文の成績」、「最終試験成績」のそれぞれについて合格とする者４名、不合格とする者１名と意見が分かれた。不合格と判定した審査委員は、形式面・技術面において「英語論文としての完成度」が不十分であること、内容面についてはインタビュー偏重主義という方法論上の致命的欠陥があり、「叙述自体の論理性・実証性」に問題があることを指摘した。他方、合格とした委員は、それらの論文の欠点については認めるものの、博士論文を総合的に評価をすればそれが不合格の判定をくだすほどの欠点とまでは認められないとした。

一審査委員として不合格と判定した審査委員は、審査委員会としての最終判定は主査に任せるとした。主査は、合議の結果、「審査委員会の評価」としては「博士論文の成績」、「最終試験成績」ともに「合格」とすることが妥当であろうと判断した。よって、本審査委員会としては、ルスタン氏に博士号（日本語・日本文化）を授与することが妥当であるとの結論に達した。